

手と手で紡ぐ日本語

横浜市立ろう特別支援学校 高校三年 糠谷 栞里

私は二つの言語を使い分けている。一つは私たちが日常生活で使っている日本語。そして、もう一つは、最近テレビの画面でもよく目にするようになった手話である。私のように聴覚に障害がある者にとっては、二つの言語がとても大切な役割を果たしている。

私は幼稚園から中学二年生の前期までは一般の学校に通っていた。それまでは手話を使うことはなかった。小学生の時、初めて手話に出会ったが、よく分からず遊び感覚で日常生活で使うことはなかった。私がろう者の世界に本格的に入ったのは中学二年生の後期にろう学校に転校したのがきっかけだった。

そこで初めて手話の一つの言語であることを知った。それまで口話だけでは分からないことが多々あった。私にとって、手で話をする世界はとても新鮮で初めてにもかかわらずほとんどの内容が理解できた。

手話に出会う前の私は、言葉を考えて選ぶことなくただ思いついたことだけを声に出していた。それ故、人を傷つけることが度々あった。言葉の大切さや意味を深く考えていなかったため、人間関係が上手くいかず自分の殻に閉じ籠もってばかりいた。

手話には一つ一つ意味がある。例えば、「こんにちは。」これを手話で表現すると、人差し指と中指二本を額に真っ直ぐ持つていき、次に両手の人差し指を向い合せにし、目の辺りで曲げる。最初の動作は時計の十二時、つまり昼を意味し、後の動作は、人と人が挨拶する様子を表している。

このように手話には、一つ一つの動作に意味が込められている。この意味を考えるのが面白く感じるようになり、言葉に興味を持つようになった。昔の私は、平気で人に「死ね」などの悪口雑言を浴びせていたが、今思うともってのほかである。今では相手を傷つけないように、言葉を選ぶようになった。

手話に出会い、自分の気持ちを素直に表せるようになり世界が変わった。友人もできた。言葉を使って表現することは素晴らしいことだと日本語に対する価値観も変わった。

私たちが発する言葉にはそれぞれ意味が込められ、人の思いや感情が詰まっている。それ故、私たちは言葉を駆使して生活している。言葉がなければ自分の気持ちは伝えられない。私たちににとって必要不可欠なものだとやっと思えるようになった。

正直、健聴の世界よりも「ろう」の世界の方が私は好きだ。単に手話に出会ったお陰で自分が変わることができたからではない。手話と口話には大きく異なる点がある。それは、口話は人の顔を見なくても自分の気持ちを相手に伝えることができる。たとえ後方から話しかけても相手に通じる。

しかし、手話は必ず相手を見ないと伝わらない。後ろから手話で話しても相手には伝わらない。口話と決定的に違う点はその点にある。

口よりも手で伝える方が、相手がしつかりと見え、言葉の温かみが強く感じられる。手で感情は表現できないと思う人がいるかもしれないが、そうではない。怒っている時には、指に力が入り硬くなり、動きが大きくなる。逆に心が落ち着き優しい気持ちの時には、指が柔らかく身振りもゆったりとする。手にもしつかりと感情が通うようになる。

私が一番好きな手話は「ありがとう」だ。左の手の甲に、右の手を直角に乗せ、上げる。

その時、感謝の気持ちを顔の表情に込め表すことで口だけで表現するのでは全く違う感情がこもることになる。

遊園地に行ったとき、友人と買い物をした。レジで清算を終えた時、店員さんが「ありがとうございます。」と手話で表してくれた。正直驚いたが、なんだか嬉しかった。口で「ありがとう。」と言われるよりも手で表現してもらう方が気持ちがいい。私は好きだ。私自身、できるだけ「ありがとう。」としっかりと手話で表すようにしているのも、そんな手話への思いがあるからかもしれない。

人と人をつなぐ日本語。これは正に手話のことではないかと感じている。見知らぬ者どうしをつなぐことは、相手をしっかりと見なければできない。手話は相手が目の前にいなければ伝えることができない。私自身手話を使い始めて四年半しか経っていない。まだまだ知らない手話がたくさんある。人と人をつなぐことができる素晴らしい手話をこれからも学んでいきたい。そして、より多くの人々に手話に興味を持ってもらい覚えて欲しい。ろうの世界は健聴の世界よりも遥かに狭い。手話ばかりではなく、使う日本語もしっかりと勉強しなくては社会で通用しない。

しかし、私は手話も大事にしていきたい。手話は私にとってとても大切な言語でもある。ろう者同士の有意義なコミュニケーション手段でもあるが、健聴者と私たちをつなぐ大切な道でもある。その道を失わないように私はこれからも手話という言葉大切にしていきたい。